ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

「おっ、ロランじゃん。おはよう。今日は早く起きたね」

　リビングに出るやいなや、女の子と出会う。朝早くなのに、随分と元気のいい声が出るのは、おそらく朝練の後だからだろう。俺より一時間も早く起きて朝練をして、その後シャワーを浴びるのが彼女の日課だ。ドライヤーを使ったのか、髪の毛はもう乾いているが、健康的なクリーム色の肌はしっとりとしていた。麦わら色の髪の一部を、俺から見て右横に結わえた、いわゆるワンサイドアップにしている彼女の名前はレイ。

顔立ちが日本人っぽいのに、髪の毛の色が日本人離れしているのは、おそらく彼女がハーフだからだ。彼女自身、自分の親がどこの国の人なのか分かっていないので、それ以上の推察は出来ない。もっとも、彼女にはそんなこと、興味もないようなので、俺もあまり考えないようにしている。名前の由来は、番号の末尾が『０』だったからだそうだ。いくら自分の名前を決めるのに悩み、名前の代わりだった研修生番号を参考にしたとはいえ、流石にこれはそのまんますぎるだろうと、俺は思う。

「リーダー、おはよう。朝練、もう終わったのか？」

　右手を上げて、俺は挨拶をする。レイは俺より一個歳が上だが、彼女と俺は同期なので、俺は基本タメ口で話す。『ワルキューレ』では、年齢よりも経験が重視されるからである。もちろん『ワルキューレ』以外の場所では先輩なので、俺も敬語で話すが、その時レイは大抵微妙な顔をする。

「まあね。そういえば、今日は入学式だっけ？　入学おめでとう……って、私はあんたらとは学校違うから、おめでとうってのはちょっと違うのか」

　けらけらと笑いながら、レイは俺の肩をポンっと叩く。

「いや、どうだろうな。無事中学生になれて、おめでとう……ってことでいいんじゃないか？」

「あー、なるほどね」

「それじゃ、俺はちょっと外走ってくる」

　あいよー、というと、レイはキッチンへと向かう。大方、朝食のつまみ食いでもしに行ったのだろう。レイはしょっちゅうつまみ食いをしては、その度に樹葉に注意されているが、毎回、つまみ食いしてしまうのは病気なのだ、と開き直る。

　そんな彼女だが、そのサバサバとした、竹を割ったような豪快な性格から、樹葉達も不思議と彼女に頼ることが多く、そして大抵何とかしてくれる。なので、俺達の中では――さっき俺が挨拶した時から分かると思うが――レイはリーダーみたいなポジションだ。まぁリーダーなのは、最年長かつ、俺たちの中で一番背が高いってのもあるが。

　玄関で靴紐を結び、外に出る。扉を開くと、そこには道路……ではなく、自分の家の扉と似たような色の扉が数枚、目に飛び込んでくる。それもそのはずで、ここはシェアルームマンションだからだ。

エレベーターがすぐ近くにあるが、俺は階段を使って一階まで走って降りる。大した運動にはならないが、こうした小さな努力が、やがて大きく自分に帰ってくると、俺はお姉様から教わった。まだ普通に歩けた頃のお姉様も、こうした努力を怠らなかったと、俺はお姉様の側近の――いや、今は出張で、二年前から海外にいるから、側近のお役目は全て木藤さんが担っているので、「かつて側近だった」と言う方が正しいか――絵里さんから聞いた。車いすでの生活を余儀なくされ、目も見えなくなってしまっても、木刀の素振りを欠かした日はないそうだ。おそらく、今も欠かすことなく、毎日木刀を振っているのだろう。お姉様の言葉は事実、俺は以前、お姉様の剣技を間近で見たが、俺なんて到底敵わないと思うほど、美しく、そして素晴らしかった。『ワルキューレ』に入って、さらに鍛錬を積んだ今でさえ、俺は、あの時のお姉様には遠く及ばないだろう。

　コンビニ、喫茶店、居酒屋。

　外に出た俺の目に、最初に飛び込んでくる店はそれだ。初めてそれらを見た時は、物珍しさに、車の中から食い入るように眺めたものだが、今となっては、さして驚くようなことでもない。この景色にも、もう慣れた。

「うぅ……さみぃ……」

　朝起きた時から分かってはいたが、春とはいえこの時間はまだ寒い。吐く息も少し白くなるが、お天道様が灰色の雲に隠れているのを見れば、それもまあ仕方の無いことだろう。だが、チクチクと刺すような外気の冷たさに、俺はつい、そう呟いてしまった。

　とは言え、そんなこと呟いてもしょうがないので、取り敢えずいつものコースを走る。これが俺の朝練……の前のウォーミングアップだ。

少し走ると、だんだん体も温まってくる。そうなってくると、この寒さも心地いい。俺は大通りに出ると、近所の商店街の方へと向かう。たまにすれ違う人――大抵はお年寄りか、犬の散歩をする子供達だが――に挨拶をするが、『ワルキューレ』に入って間もない頃は、これが中々っずかしかったことを覚えている。大通りはまだいい方で、これがコースの途中の商店街に行くと、恥ずかしいを通り越して、精神的な苦痛を味わう羽目になったものだ。

それでもそのコースを走るのをやめなかったのは、近所の人に挨拶くらいは出来るようにならないと、とても『ワルキューレ』ではやっていけないからである。慣れるまで半年くらいかかったが、苦労のかいあって、今では普通に挨拶が出来るようになった。

　大通りを少し外れて商店街にくると、朝六時なので店はまだ開いていないが、人は割と多い。店の前の掃除をしている人もいるが、早朝の散歩やランニングをしている人が大半を占めている。車両通行禁止のくせに、道幅はトラック約二台分とやたら広いが、この商店街には、大して目新しい店があるわけでもなく、近くにデパートなりショッピングモールなりライバルも多い。店の外観も、悪い意味でレトロな感じが目立ってきたので、そろそろ廃れそうなものだが、不思議と人がよく集まってくる。多分、居心地がいいからだろう。夕方などは、実に活気が溢れていて、『ワルキューレ』の皆もよくここに来るらしい。かくいう俺も、学校の帰りや休みの日に、この先のたい焼き屋に頻繁に足を運んでいるが、そこのたい焼きが実に絶品で、あそこのたい焼きを超えるお菓子を俺は知らない。

「おぅ、友絆じゃねーか。今日も早いな」

「あらぁ、仲間君じゃない。精が出るわねぇ」

「友ちゃん、おはよう。今日から中学生だっけ？」

　道行く人に声をかけられ、俺は挨拶を返しながら、商店街を走り抜ける。ちなみに、さっきから聞こえる『友絆』とか『仲間』というのは、俺のことだ。『ワルキューレ』以外のところでは、俺は『』という偽名を使って生活している。『ロラン』を名乗ると、俺が『ワルキューレ』に所属していることが一発でばれ、色々と都合が悪いそうだ。ちなみに他の皆も偽名を使っている。偽名を使っても、顔を見られれば余裕でばれそうなものだと最初は思ったが、俺が『ロラン』だとばれたことは一度もない。

理由はすぐに分かった。今現在、日本の人口の七割もの人間が、『ワルキューレ』をはじめとした、いくつもののチームに所属しており、入って三年も経っていない俺みたいな新米の顔と名前など、誰も覚えていないのだ。一応、誰がどのチームに所属しているかのリストはチームリーダーのところに届いているらしいが、リストには名前しか載っていないので、よほど目立つようなことでもしない限り、例えば俺が『ワルキューレ』に所属している人間だということが、顔だけで知られる心配は無い。名前だけ偽名にしておけば、よほどのことがない限り、俺に無用な危険が降りかかることが無いわけだ。

とは言え、本当の名前で呼ばれない上、このような名前なのは、ちょっと複雑だ。

研修所の外に出てから知ったが、『仲間友絆』はザラにあるような名前ではない。『ワルキューレ』の外では『仲間友絆』を名乗るよう命じたのはお姉様であるが、なぜこのような名前にしたのか、俺の心中を知ってか否か、未だに分からない。以前、この名前について尋ねたことがあったが、ちゃんと答えてはくださらなかった。ただ微笑を浮かべて、「いずれ、あなたにも分かる時がくるといいわね。その日が来ることを、私は心から願っているわ」と仰っただけだ。

　商店街を通り抜けると、再び大通りに出てから、俺は駅の方へと向かう。路線が七本もある、中々にでかい駅で、この時間は通勤や通学で人が多い。当然商店街以上に人とすれ違うが、ここら辺まで来ると、流石に挨拶をしてくる人もおらず、俺も知っている人偶然会った時くらいしか挨拶しない。以前、商店街のノリで挨拶をしたことがあるが、あの時向けられた怪訝そうな目を、俺は今でも覚えている。

　そういえば、朝のランニングのコースの途中にあるから、駅の外観はよく見るが、普段の生活で、電車に乗る必要はないので、実際に中に入ったことはない。今日から通う中学校も、マンションから歩いていける距離なので、今後もお世話になる機会はないだろう。最近改修工事があり、リニューアルされたため、近所でも話題になったのだが、俺は不思議と興味が沸かなかった。白と青を基調とした、清潔感溢れるデザインで、少なくともさっきの商店街よりは『来たい』という気持ちも出そうなものだが。

　時計を見ると、短針は十五分の位置に来ている。いつもなら、この先のショッピングモールの近くまで走るのだが、樹葉には「早く帰ってきて」と言われているので、そろそろ帰ったほうが良さそうだ。俺は回れ右をして、今走って来たルートを再び走る。